

## 第3回大府市長寿社会懇話会

# 会 議 録

平成20年10月17日

### 第3回大府市長寿社会懇話会

- (1) 開催日時： 平成20年10月17日（金）午前10時から午前11時30分まで
- (2) 場 所： 大府市役所 地下1階 001、002 会議室
- (3) 出席委員： 大島伸一氏、大沢 勝氏、大山尚雄氏、堀田あけみ氏
- (4) 欠席委員： 梶岡多恵子氏
- (5) 市出席者： 岡村副市長、伊佐治健康福祉部長、池田健康福祉部次長  
広瀬高齢者支援室長、原田、舟橋
- (6) 傍 聴 者： なし
- (7) 取 材： 中日新聞社【長坂氏】
- (8) 会議内容
  1. 会長あいさつ
  2. 理想の長寿社会を目指して
  3. その他

# 開 会

## 【広瀬】

皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

それでは、ただいまから、第3回大府市長寿社会懇話会を始めます。本日、梶岡委員は大学の都合により欠席されております。また、市長は他の公務がありまして、欠席をさせていただいておりますので、よろしく願いいたします。

まず、会長のご挨拶をいただきまして、引き続き議事の進行をお願いしたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

## 1. 会長あいさつ

### 【大島会長】

おはようございます。

前回までに、これからの高齢社会の現状や問題点などを自由に出していただきました。どちらかという、暗い話が多かったような気がしますが、問題点をあぶり出すことによって、どのようにいい状態に展開していくかということでもありました。

今回からは、あるべき姿、理想的な姿をどう構築していくかという方向に議論を持っていきたいと思えます。

繰り返しになりますが、超高齢社会というのは、歴史上、世界に例を見ないことであります。理想的なモデルになるものがないので、自分たちで考えていくしかない。

一方で、すでに人口構造において、非常に大きな変化が起こり、変化そのものが現実いろんな場で起こっている。社会保障問題を中心として、いろんなところで深刻な問題が噴出しかかっています。そういったことが社会不安に繋がっている現実があります。

したがって、高齢者が増えるということは、どう捉えるかは別として、負担が増えることに深い関係があるということは間違いない。負担が増えるということを従来のようなものの考え方で「負担が増える」と捉えるのか、あるいは、発想の転換をして「それは負担ではなくてむしろ違った意味の明るい展開に繋がる」という考え方が出てくるのか。少なくとも従来のものの考え方でいけば、明らかに負担が増えるという現実があります。

社会的には非常に深刻度が増してきて、いろんな議論が国や県でも始まっていますが、始まってはいるけれど、「困った。困った。」と言っているだけで、具体的な施策に繋がるような話は、私が知っている限り、非常に少ないのではないかと思います。

我々がここでしている議論というのは、少なくとも「困った。困った。」から1歩抜け

出した議論にしていこうという状況を目指しているという点では、1歩も2歩も先に進んでいるのだと思います。

今日は、式次第にもありますように「理想の長寿社会を目指して」ということで話し合いたいと思います。その前に、今までの議論を踏まえて、事務局から説明をお願いします。

## 2. 理想の長寿社会を目指して

### 【原 田】

原田です。よろしくお願いします。

本日は、少し具体的な議論に入っていられることと存じますが、その前に、事務局から、「前回までのまとめ」などをご紹介し、第1回と第2回の会議を振り返っていただくとともに、「超高齢社会とは何か」について、少しご紹介させていただきます。

まず、前回までのまとめをご覧ください。

第1回、第2回におきまして、委員の方からこのようなご意見を頂戴いたしました。まず、世代間の交流や地縁等のネットワークづくりの必要性。医療、保健、福祉、都市開発等の異分野の協働や、民、学、産、官の連携。その人らしい生き方ができる社会の実現。まちづくりを行うときに「高齢者」をキーワードとすること。また、就労や社会参加などの生きがいつくり。高齢者だけでなく、今後そうなる若い世代への健康教育の必要性。また、「高齢者」という言葉に冷たい響きを感じるといったことや年をとるにつれ、親世代をお荷物のように感じてしまう社会の傾向を踏まえ、「年長者に対する尊敬の念を切らないような取組があるといい」というお話もありました。

そして、社会の幸せは、個々の幸せが根底にあり、個々の幸せを満たしていければ社会全体の幸せに繋がるといったようなお話もありました。

ここで、改めて、「超高齢社会とはどんな社会か」ということを確認し、問題点の洗い出しの参考にしていただければと思います。ここでは、一般的に言われていることを「経済」「暮らし」「地域」といった3つの点からまとめましたのでご覧ください。

まず、経済、産業について言いますと、労働力人口の減少。生産活動の縮小。税収の減少。社会保障費の増加。高齢者対象ビジネスの拡大が挙げられます。

暮らしの面では、一人暮らし高齢者、特に女性は大幅に増加する見込みです。その背景には、離別、死別の他に未婚率の上昇もあり、「単身世帯」かつ子どものない「無子世帯」が増えていくものと思われます。そして、高齢者が高齢者を介護するという老老介護や認知症の人が認知症の人を介護する認認介護がさらに増加します。

また、「働く世代による高齢者世代扶養の困難化」とありますが、4人に1人が高齢者となれば、働く世代に負担がかかるのは当然のことながら、それに加え、現在30歳前後の若者を中心に不安定な雇用環境にあることが問題視されています。フリーターやニートと呼ばれる若者は、社会を支えていくことが期待されている年代にもかかわらず、逆に社会に支えられることになってしまうのではという危機感が持たれています。

また、高齢者に対する医療や介護に係る費用が増加する一方で、労働力が減少することから保健、医療、福祉等の生活関連サービスの低下についても懸念されています。

また、生活が豊かになればなるほど、心の豊かさや暮らしの質を重視するというライフスタイル志向が高まっていきます。

3つ目は、地域の面です。地域の高齢化が進めば、地域社会に積極的に関わる頻度も減り、コミュニティ機能が低下すると思われれます。また、認知症高齢者など要支援者の増加により、地域のつながりが難しくなることや、一人当たりにかかる地域活動の負担が増加することが懸念されます。一方で、元気な高齢者も増えることから、子どもや弱者の見守りといった地域を支える人材として、高齢者の活躍が期待されます。

このような話をすると、やはりマイナス面が多い印象を受けてしまいますが、その中でも、マイナス面を克服し、プラス面をいかに引き出していかを考えて、政策やしくみづくりに繋げていければと思っております。

そして、これは、理想の長寿社会のイメージ図です。理想の長寿社会の条件であります、「安心して暮らせるまち」「生きがいを持てるまち」「自分らしく過ごせるまち」「健康が保てるまち」この4つを実現させるために、社会資源や公的支援を活用し、地域住民や団体と連携しながら、理想の長寿社会を目指していこうというものです。そのため「しくみづくり」がこんにちの課題であります。

そして、この4つのまちづくりのキーワードとなるものをこれまでの懇話会でいくつか出させていただきましたので、ご覧ください。

まず、「安心、安全」「生きがいづくり」。それから、「QOL (Quality of life) 生活の質の向上」「尊厳、誇り、プライド」「自分らしさ」。そして、「健康、健康長寿」「多世代交流、協働、連携、地域福祉」「『高齢者』に代わる用語」。

こういったいろいろな視点からのキーワードを委員の皆さんに出していただきました。

そして、この後、具体的なお話に入られることと存じますが、先ほどのキーワードやこれからいただくご意見を、3つの視点でお考えいただくとよろしいのではないかと思います、ご提案させていただきます。

まずは、理想の市民像です。生きがいや健康づくりといった個人の目線に立って取り組むべき内容のものがここにあたると思います。

2つ目は、理想の地域像。コミュニティや協働といった、地域社会のしくみづくりの

ようなソフト的なものがここにあたると思います。

3つ目は、理想の都市像。基盤整備や企業誘致など、市全体を豊かにするような、どちらかというとハード的なものがここにあたると思います。

これら3つの視点に基づき、それぞれの理想像を描いていかれてはと思い、ご提案させていただきました。どうぞ、よろしく願いいたします。

#### 【大島会長】

今の説明でご質問がありましたらどうぞ。

#### 【委員ら】

なし

#### 【大島会長】

それでは、具体的な議論に入らせていただきます。

今、事務局から、人の問題、ソフトの問題、ハードの問題について、それぞれ議論していただくという提案がありました。これもうまいまとめ方だと思います。一応、その提案にしたがって、お話をうかがっていきたくと思います。

最終的には、そこに住んでいる人がいかに満足できるかに尽きるわけです。だから、地域のソフト的なこと、それを支えていく都市のハード的なこと。それを最終的には人の問題と結び付けていく。

理想の市民像をどこまで議論するのか。そこでイメージが見えてくると、その周辺をサポートしていくにはどうしたらいいかということになってくる。

いわゆる理想の市民像がある意味で一番難しい。そこが議論の中で見えてくると、次が見えてくるのだと思います。

ということで、最初に理想の市民像という一番難しそうところからお願いしたいと思いますが、いかがですか。あるいは、「こういうところから議論を始めては」というご提案があればお願いします。

#### 【大山委員】

的を射ているかわかりませんが、7月29日NHK教育テレビで「男性長寿日本一」ということで、横浜市青葉区の例が放送されていました。

ここで言われていたのは、ストレスが少ないこと。市の環境がよいこと。客観的に見たのですが、ゆっくり歩いている人が多く、元気老人が多いとのことでした。

これらについて、日本福祉大学の保健福祉学科の近藤克則先生がコメントをされておりましたが。

個人の心の持ち方が、大きく影響しているのではないかと思います。私も地域で生

活をしておりますが、このあたりでは早足で歩く人が多いのではないかと思います。気持ちが落ち着いているということは、ストレスがないということでしょうし。

青葉区の場合は、公園も多いし、医療機関も多いそうです。安心して暮らせるという背景があるのですが、まずは自分自身の気持ちの持ち方をもう少しゆっくりと。スローライフ的な暮らし方に誘導していくのも大事なことなのかなと、この番組を見て感じました。

男性の場合は、所得が多い人ほど長寿であると、近藤先生がデータの中で言っておられました。女性の場合は所得に関係ないそうですが、男性の場合は、所得が多い人の方が長寿で、心に余裕があるということをおっしゃられました。

所得を多くするかは、個々の事情もございますので、何ともしがたいことがあります。少なくとも気持ちをそのように持っていかなければならないような、豊かなまちづくりが必要。公園が多く、医療施設が整っていて安心感があるということについては、市で考えていただける内容だと思います。自助努力もさることながら、こういう気持ちのよりどころも非常に大切だと感じました。

#### 【大沢副会長】

大山さんがお話ししたことの中で、お金の話のことはわかりますね。お金に苦労しないとその分だけストレスは無くなります。

僕も、今やっている仕事を全部辞めて、この後どのようにやっていくかを考えると。経済的な問題とかね。また、僕の場合、高齢夫婦ですからね。老老介護も考えなくちゃいけない。その場合にどうするかについて、ある程度の見通しがついていれば、わりと外部からのストレスは、放電できるんです。避けられるんです。そこがわかりにくいと、非常に不安だし、ストレスも大きくなります。ですから、そういうシステムをまちの中に作らないと。自助努力だけだと、無理が出てきます。

自助努力ということから言うと、僕は、教育と福祉を繋げないといけないと思います。これは小さいときから訓練が行き届いていないと、年寄りになってから「どっかの生涯学習センターで勉強したらすっかりよくなった」なんてことには、なかなかかなりにくいと思うんです。

僕がいつも自分に言い聞かせているのは、「自立と自律」なんです。「自分で立つ」、そして「自分を規律する」ということ。やりたいと思うことを止めなければいけないことがあるかもしれないし、つらいと思ってもやらなければならないことがあるかもしれない。「自立と自律」を僕は死ぬまで捨てないつもりでいます。これがないと、家族が崩れていったときでも、なお生きていこうとする力が出てこないですから。家族が離れたときに生きにくくなります。そういう意味で「自立と自律」をどう育てるか。これは、子どもの教育から繋げてやっていかないとできないと思う。

ノーベル賞をもらった2人の先生に共通しているのは、「自立」の部分ですね。これは

おそらく子どもから青年期にかけて意外と強いものを持っていますよね。

学校教育の中では、しぼりが強すぎて、そういうことが発揮できないという傾向がないとも言えないわけで。そういう点で開放していくことがいいのではないかと思います。

これは心の問題でしたが、次は、体の問題ですね。体が丈夫でないと弱気になって、うつになったりします。自分の責任ではなくて、体を壊す場合が出てくるんです。そのとき、そのことをカバーできるような医療や保健のシステムがあるまちになっていけば、それがその人の自ら立っていこうとする力を外から支えることになると思います。

それから、もう一つは「生命」。心と体の健康と、生命の安全ですよね。生命の安全が脅かされてくるとね。これは、面と向かって喧嘩しているときはそうでもないんですけど、突如として何か降りかかってくるかもしれないという状況で暮らすのは非常に難しい。ですから、防犯等を含めた生命の安全がこのまちでどれだけ守られているかというところに、個人の育ちが関わってくるのではないかと思います。

取り急ぎは、そういうことで、子どもから長寿に至るまで一貫した健康プログラムを。市民の誰が見ても、終末を迎えるときに安心できるというものを。企業の方たちとも話し合っってやっていく必要があると思います。

理想の市民というのは非常に難しいけれど。個としての人間が、何を一番大事にしていかなければならないかと言ったら、僕は「自立と自律」だと思います。そして、身体的な条件と経済的な条件をある程度整えて、そういうシステムがいるだろうと思います。

障がいを持っている人だって、自分で好んで障がいを持っているわけではないですから。そうすると、その人たちも安心して暮らせると思うんです。

僕の頭の中では、そのこととウェルネスバレー構想のところで、どんな職、どんな工場、どんな産業をそこへ持っていくかということとを繋げておきたいわけです。そうやって、どこかで一貫した健康プログラムがまちの中で組み立てられていくと。それが個人の理想の市民像に繋がっていくのかなというふうに思います。

#### 【大島会長】

「自立と自律」をきちんと達成できるような個人、市民をどう作り上げるか。「作り上げる」というのは、ちょっと表現が適切かどうかわかりませんが。それを子どものころから大人になるまで、一貫して、「自立と自律ということは、極めて重要なことだ」という教育をきちんと行う。それは、一つの地域の中の文化のような形で、いろんな場面で、身に付けさせると。

しかし、それでも人は誰でも支援が必要な状況になりうる。そうなった場合、少なくとも生命、身体、経済的なことなど、人として生きていくための最低のレベルを保障するシステムや体制が地域の中にあるということは、非常に大きな安心感を生むことになり、「自立と自律」ということをさらに進めていく大きな励みになるというお話だったと思いますが、いかがでしょうか。



## 【大山委員】

先ほど、経済的な部分での豊かさというか、不安がないのは大きいということについて、大沢先生に「そのとおりだ」とおっしゃっていただきましたが。

私が今、関わらせていただいているシルバー人材センターの運営に関する部分なのですが、「仕事がしたいときは、仕事はここにあるんだよ」ということを強く発信していきたいのですが。こちらの力不足のせいかもしれませんが。ホームページやケーブルテレビニュースなどでお知らせはしているのですが、市民の皆さんの反応がないということは、シルバー人材センターの魅力が今一つなのかなと。

「シルバー人材センター」＝「公園の草取り」という定着したイメージがあるようで、そこを払拭したいと思っています。私が就任したのは、今年の6月からですので、まだあまり姿にはなっていませんが、何とかご理解いただけるようなお知らせをしていきたいと思っています。

それで、「シルバー」という名前もどうなのかと。老人クラブもそうですが、「老人と聞いただけで入りたくない」というような話もよくあります。

シルバー人材センターの方でも、胸を張って「シルバー」と言われる方もいらっしゃるのですが、それを否定することになってはいけませんが、やはり「シルバー」というと、世間から見たときに、現役を退いて、少し外れたところを歩いているかのように受け止められてしまうこともありまして。

シルバー人材センターは、全国的なロゴとして、SC (silver center) というバッジがあります。それで「SC大府」のようにサブタイトルを付けて、少しずつ変えていこうかという話をしています。そして、もっと気楽に電話できるように、覗いてもらえるようにPRしていきたい。

そんなことを、会員に諮って、もっとシルバー人材センターを明るく捉えていただき、認知していただき、気楽に就労してもらうために努力していきたい。

高齢者は増えているわけですが、実際、登録されている方は、横ばい状態というか少し右肩上がりぐらい。とても私どもの5か年計画の人数増加には及ばないので、努力不足を感じています。

自分で、前向きに取り組むということは、ボランティア活動をするのか、シルバー人材センターみたいところで働くのか、地域で何か趣味の活動を通じて自己実現するのか、そういうところに行きつくのかなと思っていますので、シルバー人材センターの活動をもう少し認知していただく努力をしていかなければいけないと思っています。

## 【大島会長】

リタイヤしている方は、今、実際何をしていますのですか。

**【健康福祉部長】**

シルバー人材センターの登録は、800人くらいでしたか？

**【大山委員】**

いや。まだ560数名ですね。

**【健康福祉部長】**

高齢者が1万人以上ですから、圧倒的な人がご自宅にいるということですが、大府市の場合、農業をやっている方が多いと思います。

ただ、今まで、皆さん男性のイメージでお話されていますが、女性はわりと元気ですよ。

**【大沢副会長】**

女性の方が自立している。

僕は、38万人の老人クラブの会長ですが。たけど、実際に活動しているのはその中の10%。それを20%まで引き上げたい。7～8万人に引き上げようと思っていた。

名称、愛称、ロゴを今、県で公募しています。どんなのが出てくるかわかりませんが。それはそれでやるにしても、実際には、年をとった人が、まちの中で働いている姿を多くの市民の人に見てもらいたいんじゃないかと思っていました。

そうしたら、半田市が半田警察署と一緒に、子どもの登校時間など、1日のうちの何回か、防犯のためのパトロールをやり出した。高齢者が3万人ですよ。老人クラブの会員3万人。半田市がそれを組織して、老人クラブ会員3万人がまちをうろつき始めたんです。

僕の住んでいる所もそうですが、「パトロール」と書いた黄色いのを着て、動き回っているんです。そうすると、「おじいちゃん」とか言って、子どもたちが接触してきますね。子どもと年寄りの世代交流ですね。それをやろうとすると、子どもにお父さん、お母さんが必ず付いてきますね。登下校時に、おじいちゃんたちが、自分の子どもの安全を守ってくれていると思うから、お母さんたちPTAも旗を持ってやるしね。保育園の先生たちも喜んで「声をかけてくれてありがとうございます」と言っている。

それをもうちょっと組織的にできるんじゃないかと、半田市の場合の例を見て思いますね。3万人というのは別として。老人クラブの会員としてやっといこうと呼びかけているのが3万人ですから、その中の2割や3割が動いても相当な数になります。それが街中をうろろしますと、結構目立つわけですから、何となく安心しますよね。

これは、そういうことも一つの案ということで。

#### 【大島会長】

そのアイデアは、行政から出たのですか。老人クラブから出たのですか。

#### 【大沢副会長】

半田市の社会福祉協議会と老人クラブが。老人クラブのパワーアップをしたくて、警察と話をしたんですね。どちらからというか……。実際、老人クラブはやっていたから。だいたいどこのまちでもやっていますよ。やっていることはやっているんですよ。ただうまいことシステム化したというかね。

#### 【副市長】

大府市の場合は、老人クラブというか自治会やコミュニティの単位で、必ずしも高齢者ではないが、高齢者の方が主体となって、登下校の時間帯に合わせた見守り隊がいます。神田地区ですと「かんちゃんパトロール」といって、組織されております。

あと、防犯活動で、今「青パト」というのがありますね。自家用車に青色の回転灯を付けた車が。そういうのを全地域の地区で、それぞれ自主的に自由な時間帯でやっていただいております。ですから、高齢者の方は、自治会活動に結構従事していただく場合がありますね。

あとは、趣味の関係で言いますと、例えば、サークルとか文化協会とかは、高齢者の方ばかりで。写真、絵画、踊りとかのサークル活動を一生懸命やっておられます。あとは、シルバー人材センターとか老人クラブ活動とか。

#### 【大島会長】

先ほどこちよつと言ったのは、うちに居るのは、いいんだけど、うちに居っぱなしで外に出ない人。閉じこもりの人は、1万人のうちどのくらいいるのか、男性で何%、女性で何%とかいうのが見えるのか見えないのか。

要するに、何かやっていないと。何かをやるということが生きているという実感に繋がるのであって、年をとってから何もやってなくても、それはそれでいいのかどうかを考えると、直感ですが、おそらく耐えられないだろうと思います。だけど、その年になってみないとわかりませんが。

それで、何かやるっていったい何だろう。自分の好きなことか、やりたいことか、社会的に役に立つことか、お金が儲かることか、そのくらいのことしか思い浮かばないのですが。そうすると、自分の好きなことで、お金も儲かって、社会の役に立つような調子のいいことがあれば、言うことないんだけど、普通はなかなか難しい。

例えば、交通費や弁当代くらい出してくれたら喜んでやりますよとか。交通費はいらなから社会的に役に立てばそれで充分だということもあるだろうし。あるいは、人のことはどうでもいい、自分の好きなことのための場所や環境を与えてくれたらそれでい

いという場合もあるかもしれない。

私なんかは、直感的にそのくらいのことしか思わないんですけど。いかがでしょうか。

#### 【大沢副会長】

ウェルネスバレー構想みたいところでね。高齢者の働く場所をね。高齢者が自ら切り開けるものをね。シルバー工房みたいなものでもいいんですけど。現に愛知県にあるんですよ。老人クラブに入っている人ではないんですけどね。でも、僕はそれも老人クラブを全部通うようにしたい。

#### 【大島会長】

老人クラブのイメージってどんなイメージですか。

#### 【大沢副会長】

今の老人クラブは、老人が集まってね、女の方は、お嫁さんの話をブツブツ言ったりね。暗いイメージはありますね。でも、話すだけでなく、実際はいろんなことをやっていますよ。僕なんかグランドゴルフに熱中していますよ。そういうものをたくさんやっているんだけど、38万人の中で、動いているのは1割ですよ。あとの30数万人はあまり動かない。それでは、困るのではないかと。

僕は老人クラブというのに必ずしもこだわらないけれど、年をとった人が自分たちの生きがいを持ってやっていこうというときにね。今、いろんなところに工房ができています。これは、団塊の世代を中心にやってる。

定年になったいろんな技術者がいる。大府なんかたくさんいると思う。僕が地域で集まって話をする人の中には、豊田のエンジン設計者や車のデザイナーがいます。声をかけたときは、何をしていた人かは知りませんでした。集まっているいろんな話を聞いたら、そういう人がいることがわかった。

僕の場合は、そういう人や和歌や絵手紙の先生だとかいう人が入っていますね。だけど、いろんなところにある工房は、技術者が集まってね。模型づくりや暮らしに役立つ物を作り出して、インターネットで販売しています。細々だけど、自分が作ったものの価値が、お金という価値ですが、生み出される。お金という価値じゃなくても、他から声がかかって、「その話をしてよ」と言われて行くと結構うけちゃうとかね。「お金」と、伝えるという「文化」の価値ですよ。

#### 【大島会長】

そういう話がどこまで一般化できるかという話ですね。それは特殊な話ではないかと。私が言いたいのは、どういうことかと言うと、日本の社会というのはある一定の社会の中で、仕事をしていて…。言い方を間違えると差別用語になるので、難しいんだけど、

いろんな立場の方がいますよね。それが社会の一つのあり方を決めてきていると。官僚や重役レベルの人もいれば、ずっと役職なんて関係ないところにいた人もいて。それが、ある一定のところまでリタイヤしたとき、「次からみんな老人として一緒ですよ」って言われて、一緒になれるかと言ったらなれないんじゃないかと。一緒になれるということになると、「老人クラブは誰がリーダーなんだ」と。「俺は大学教授もやっていたんだぞ。あんなところへ行ってやれるか」と思う感覚とかね。そういったことをちょっと象徴的に言っているんですけど。そういうことは、すごく大きなことなんじゃないかと思うんですが。

#### 【大沢副会長】

老人クラブをどうするかは、僕や老人クラブの問題ですからね。パワーアップだって言っただけです。

それよりも、団塊の世代を含めた、元気で何か力があって、頑張ろうとしている人が、きっかけがなくなるとすごく急速に力を落としていくんです。それは、非常にはっきりわかる。だからどんな手がかりでもいいからやると。その一つが工房とだけいます。それはそんなにたくさんいるわけではないけれど、そういう人たちを置くと、さっきも触れましたけど、他のところから呼ばれるんですよ。「あの人の竹細工が素晴らしくて、本物に見える」とかね。

働ける人たちのいくつかのポイントを注意深く見て。そして、ウェルネスバレーの都市構想があるなら、そういう人たちがちゃんと位置づけられるようなものを考えて。工場ばかり呼ぶのではなくてね。こういうのは全国にありませんよ。

#### 【大島会長】

大沢先生の言うことはすごくよくわかります。例えば「工房」というのは、すごくイメージできるし、いいことだと思います。しかし、工房を立ち上げたとき、それはものすごく限られた人だと思います。実際にリタイヤした人の50%がそれに来るなんてことは多分ありえないですよ。それは何%ぐらいかわからないけれど。工房というふうにイメージできるものを、30でも40でも作ればいいんじゃないかと。だけど、そこがちょっと私のわからないところで。

例えば、短歌が好きだと。短歌が好きな人間が集まってやるようなことは、いったい全体のどれだけかとなると、数としては少数ではないのかと。

そうすると、大多数は何をやっているのかと。リタイヤしたときに、何もやることがないと。「私はいったい何をやったらいいの?」「社会はいったい何を準備してくれるの?」といったときに、「どこを見回しても何もなし」というのが、今の状況ではないのかと思うのですが。

#### 【大沢副会長】

「今の状況」というのは、言い過ぎだと思いますね。今の状況は、団塊の世代が何かをやろうとしていることは、かなりはっきりしています。

何をやっていいかわからないけれど、何かやろうとしているのは、弱ってくるから。それもはっきりしています。だから、そこにどんなソースがあるかわからないけども、人間の興味や関心を掘り起こすための装置が何かいるのではないかとっているだけで。

例えば、絵手紙の先生なんて何千人もいますよね。僕のグループでは一人だけ。そこでエンジニアとかいう異分野の人と話をしていると絵手紙の先生もいろんな影響を受けるんです。そして絵手紙の先生は、絵手紙の世界で、新しい領域の話をしなが、絵手紙を楽しむ。

ですから、働かれる切り口をどっかで作らないと。大島先生が心配されている「何にもやる気がしない」とかね。

#### 【大島会長】

やる気がしないのではなくて、やる時間もあるんだけど、何をやっていいかわからないというか。

#### 【大沢副会長】

何をやっていいのかわからないときは、だんだん無気力になっていくんですよ。ですから、なるべく早めに、そういうしくみの中に入れていく装置が必要。まちの中に今はないから。だから、大島先生が心配されることが起こります。そういうのを少し工夫していく必要があると思います。

#### 【副市長】

地域によって、リタイヤした人の居場所があるかないかがだいぶ違うと思うんですが。大府の場合、リタイヤした人というか高齢者の居場所ということで、例えば地域ごとに公民館が整備されています。そこでは、絵手紙、俳句、踊りとかの文化活動ができる場になっています。

それから、児童老人福祉センターも地域ごとに設置されていますし、そこで趣味の碁をしたり。結構そういう居場所はあると思います。

働く場所につきましても、大山委員がおっしゃいましたようにシルバー人材センターがあります。あるいは老人クラブ等の活動。あと、市としては、生涯スポーツというところで、いつでも気軽にできるような身体的負荷の少ないニュースポーツをこれから推進していきたいと思っています。

それから自治会活動ですね。大府の場合は、一生懸命やっただいております。リタイヤした人がそこに入って、会長などに就いていただく事例も多くあります。

このように自治会活動、コミュニティ活動など、メニューとしてはたくさんあると思  
っているので、それをさらに活性化していけば、高齢者の居場所としてはあるのかなど。  
そして、さらに大沢委員がおっしゃったように工房などでね、技術を持った人の居場所  
を。大山委員のように豊田関係の技術者の方が地域にいらっしゃると思いますので。

#### 【大沢副会長】

募集してみるとわかると思いますよ。結構おもしろいと思いますね。工房というのは  
一つの例ですけどね。

大島先生のご心配はね、それにもかかわらず、自分は何をやっていいかわからないと  
悩んでいる人のこと。比率から言ったら、そちらの方が多いですよね。

#### 【堀田委員】

どこまで世話をすればいいんですか。私なんか聞いていて思うんですね。私は今、  
学生を相手にしていますが、やっぱり、こっちが何を働きかけても、ボケっとして何も  
しない人、リアクションが返ってこない人がいますよね。

それで、いろんなお膳立てをしても、リアクションが返ってこない人というのは、何  
もしたくない人では。ボケっとして、幸せな人もいるのではないかと思うんですね。

私は「理想の市民」「理想の都市」っていうのが、誰にとつての理想なんだろうという  
ところで、すごく難しいなと思っているんですけど。

自治体がどんなお膳立てをしても乗ってこない人っていうのは、いると思うんです。  
その人の面倒をどこまでみなければいけないんだろうかと思えますし。

先ほど、一人暮らしの高齢者のお話の中で、女性の単身の方が増えているという話が  
ありましたけど、確かにそうだと思うんですね。私の母も、父の母も、義母も「お一人  
様」ですけど。私が見ていると思うのは、女性の一人は、ほかっといっても大丈夫な  
のではないかと。

私は、社会人の講座を受け持っていますけれど、女性で死別され、単身となった方は、  
旦那さんとのことを、皆さんいい思い出として話されるんですね。若い頃はこんないい  
ことがあったとか、プロポーズされたときはこんなふうだったとか、いい思い出として  
文章にまとめていかれるのに、男性で単身の方は、「早くあっちへ行きたい」ということ  
ばかりおっしゃる。「寂しいから」とか。

女性は、年をとっても、「早くあっちへ行ったほうがいい」とか「あれやだ。これやだ。」  
と言っても、結構しゃんとしている。

私は、男の方にはできるだけ小説を書きましようと言っています。エッセイを書くと、  
愚痴と悪口になるから。「小説を書いてみませんか」と言って、「大作家になったつもり  
で好きなテーマで書いてください」と言うと、結構、歴史の話だとか、ご自分が旅行し  
たのをまとめて別の主人公が旅をしたりだとか。生き生きとしてもらえることが多いの

ですけれども。

何年かそういう仕事をしていまして思いますのは、女の方は、どんどん前へ進んでいられる。男の方は、「こういうふうにしましょうよ」とか、「こういうこと書くと暗くなるからこうしたらどうですか」と言って、ようやく進んでいかれるといった印象があります。

ですから、数的には少ないし、経済的に安定しているかもしれませんが、男性の一人暮らしの方のケアというのは、私はとても重要ではないかと思っています。たくさんいらっしゃる方の全部を救うのは難しいと思うので、ターゲットをしばって。ターゲットの中には、技術はきちんとあって、やる気があるのに手がかりがない人。やはり、私たちの世代からみると、技術のある人は尊敬に値するんです。

私たちの世代は、何となく、これから先、年寄りになっていくのに一番やっかいな世代だと、私は自覚しているのですが。

自分から何かをするのがいい子ではなく、人の言うことを聞くのがいい子だという世代です。先生の言うことを聞く子がいい子だと言われて育ってきましたし。

急激に手でする仕事がなくなっていった、鉛筆も電動の鉛筆削りがあったし、洗濯も全自動洗濯機がやったし、靴紐もマジックテープ・・・というようにやり始めてきた世代ですので、一番やっかいな世代で。指示を待たないと何もできない世代がこれからどんどん高齢者となっていくんですね。

ですから、それにあたってはやはり、人数も多いですし、全部を救うのは難しいと思います。「理想の市民像」とありますが、ちょっとひねった見方をすると、かつての理想は、言うことを聞く市民だったと思います。ただ、これからは、多少逆らうことがあっても、自発的に、アクティブに動けるのが理想の人ではないかと思っています。

「こういう人たちに対して、こういう場所を用意しますよ」という、きちんとターゲットをしばった対応の仕方が、重要なのではないかという気がします。

私は、本当に自分たちの世代に対してすごく危機感を持っています。言うことを聞く子がいい子というふうに育った世代で。先ほど、大沢先生が「自立と自律」とおっしゃっていましたが。私たちの世代、昭和30年代生まれは、2つの「そうぞう力」。「イメージネーション（想像力）」と「クリエイティビティ（創造力）」というのがキーワードで。

先生から言われたことをするのがいい子で、そこから外れたのが悪い子だったんですけれども、そうではなくて、先生が言った別の可能性から物を考える力、それから自分で何かを作る力というのを持っている人間がきちんと生きていける。

今、小学校とかを見ていると、そういう教育がなされていると思います。そっち側の教育にシフト変更されていると思います。

ですから、私たちの世代がリタイヤして、「指示を待っているよ」といったときに、「こういうことを自発的にしなければいけませんよ」という啓発ができるようなシステムがどうしても必要じゃないかなと。でないと、今の自分の周囲を見ていると、20年後こそ



が引きこもり状態のピークではないかと。それ以降になると、またパワーのある世代が出てきますけれど。ちょうど親の世代が高度成長期を支えたというその子どもたちの世代がこれからの問題かと思います。

#### 【大山委員】

女性が長命だということは、日々の生活に耐えていける力を持っているからか。男の場合は、何か与えられていないとなかなか自分から求めていけないところから、自分の人生に対して、どっかでピリオドを打ってしまうようなことがあるのかなと。

そう思うと、男性に向かっては、リタイヤ後、どんどんいろんな誘いをかけていかないと、なかなか生活していけないということを感じましたね。女性の立場からのお話を堀田さんから教えていただければと思っておりましたところ、いみじくもお話いただきましたが。

女性はそれだけ耐えていける。確かに文化協会等を見ても女性の参加の方が多い。自分から探していけるのでしょね。男性は、なかなか誘っても参加は少ない。逆に、老人クラブになれば、積極的に参加しているのは男性が多いという現象もあるのですが。シルバー人材センターも圧倒的に男性が多いですね。ということを見ていると、誰かと常に関わっていないと男性の場合は、不安だし、自分を確認できないとか、心配になってしまうのかなと。

女性の場合は家に一人でいたとしても、それに耐えていけるといえるか、処していける能力を持っておられるのかなと思いましたがね。

#### 【大島会長】

今、堀田さんが直感で自分はそう感じるとおっしゃったことというのは、事実として、はっきりしたデータがありまして、例えば 100 歳以上は、80%が女性、20%が男性。ただ問題は、その 80%の女性のほとんどは認知症で、身体状況は良くないですね。しかし、残りの2割の男性というのは、100 歳以上でも非常に健康状態が良くてですね。それは、もう「エリート」なんですね。自分の日常的なことは、みんなできるタイプ。そういうアクティブなタイプの人間が生き残っている。社会的に高い地位にあったとか、社会的に活動したとかいうのも全く意味のないことであって、毎日毎日、日常的なことがきちんとできると。

女性は、夫婦で一緒にいると、一人でいるより寿命が短い。しかし、男性は、一人でいると、明らかに寿命が短い。夫婦でいれば寿命が長い。これは、はっきりしたデータが出ている。したがって、堀田さんが言われたように、男は、いかに一人になると弱いかということが、データにはっきりと出ていますよね。

#### 【大沢副会長】

自分のことを考えてもね。堀田さんが言ったことは、当たる感じがしますよね。

#### 【大島会長】

そうですね。よくわかりますよね。

それで、私が、提起したい問題、気になっていることはですね。大沢先生のおっしゃる全体のことや堀田さんが言われるように「いったいどこまで面倒をみればいいのか」ということは、よくわかりますが。

今、女性と男性の問題が出てきましたが。例えば、同級会なんかやりますよね。私の高校は、年に何回かやるんですけれども。同級会をやると圧倒的に女性が多く出てくる。しかも、女性で主婦をやっている人が。若い頃は仕事をしていたかもしれませんが、そういう人が圧倒的に多いんですよね。

男性が出てくるのは、社会的に見て、ある程度活躍した人間しか出てこない。社長とか教授とか肩書きがいっぱい付いている人は出てくるんだけど、そうじゃない人は、出てこないですね。

これはね、今の話にも通じるんですけど、大山さんが言うように、男というのは、社会の関係性の中で、知らないうちにポジショニングしていて、そのポジショニングがリタイアした途端に切れてしまうんですよね。切れても、引きずっている人間はダメですよ。ところが、引きずらずに、頭が切り換えられる人間は非常にいいんですけど。大半は切り換えられにくいですよ。

切り換えられにくい人たちが、いったいどういうふうになっていくかなということ、すごく問題で。「そんなもの今まで何十年か社会の中で自立して、それが限界であるというのも選択だから他人がとやかく言うことではないし、ましてや行政が関わる問題でもない」と言ってしまうと、それはそれで理解できるのですが。その層が、層としては、どれくらいなのか。案外、その方が全体としては大きいんじゃないかという感じがします。

その大きい層の人たちが、大きければ、社会的な問題に繋がっていくのではないかと。大きくなければ、個別の問題として考えられるから、個別の対応をしていけばいいのであって。人と関わりたくないのであれば、それはその人の意思や選択なんだから、「そんなことは、他人がとやかく言うことではない」ということなら、私はそれでいいと思うのです。しかし、層としては相当大きいのではないかと感じるのですが、どうなんでしょうね。

#### 【大沢副会長】

ちょっと、それとずれるかもしれませんが。堀田さんが先ほど言われた「想像力と創造力」ね。これは、非常に大事なことで、「自立と自律」とをかみあわせてうまくいっていくことは、すごく大事なことであろうと思います。

例えば、60歳になって、会社勤めが終わって、これから高齢期に入って生きていくという段階で、そういう力を付けるというのはちょっと遅いんだけど、放置すると、医療費が上がるし、在宅医療の問題が出てくるし、すごい手間隙がかかってくる。それをなくそうというのが介護予防ですが。介護予防の意味も含めて、その人が持っているまだ気づかない潜在的な力を引き出すことを、いくつかの網を張ってやってみると。

先ほどこちょっと言ったんですけど、今、「工房を作ろうと思います。どなたかどうですか。どんな技術でもいいです。」とやったら、必ず、出てきますね。出てくる人たちは地域で活動しているかと言えば、必ずしもそうではない。一般公募で出てきたりするんです。

何か拾い上げる材料を見つけて。象徴的に「工房」と言っただけであって。いろんなことで、人間は目を開きますから、それをやることは、大事なことだと思います。

絶えず、高齢者問題というのは、子育て問題と繋げてね。それこそ、堀田さんの世代ともうちょっと若い世代はもう違うわけですから。そして、今度は子どもの世代になったとき、その子どもが高齢期を迎えたときに、安心して過ごせるようになれば。

男と女の問題はね。奥さんと旦那さんにそれぞれ同じ質問してね。「自分が一番信頼しているのは誰」と。お母さんは、年をとるにつれて「子ども」と答える人が多い。お父さんは、「妻」と答える。「子ども」なんて視野にないですよ。この落差が年をとると広がる。60代を超えると一番ひどい落差になる。この落差が、熟年離婚問題とかだけでなく、男性と女性の意識差が暮らしの中で出てきてね。奥さんはますます積極的に。だって、旦那が定年退職で家にいて、ある意味、非常に邪魔になるわけです。自分が頼りにしているのは、旦那じゃないんだから。他の人なんだから。一方、旦那の方は「(信頼できるのは)この人(妻)だ」と思っているわけだから。そういうようなことで、子どもを生んで育てるという生理的、生物的な部分を含め、女性が全体的に強いだろうと。

ですが、社会的活動をやっている、それはマイナス要因ではなかったと思うんです。そのプラス的要因の中には、ある装置がまちの中にあるとですね。俄然、その中に入り込んでいく。

例えば、愛知県で「まちの達人」を公募すると、男性が圧倒的に多いです。だから、今度は、老人クラブで勉強した人を「老人クラブのマイスター」といって、個々の老人クラブへ必要に応じて派遣していきます。そうすると、その人は生きがいを感じる。そして、その人の弟子を育てるというふうに、年をとった人が自ら動いていることを多くの人にわかってもらうということが、一方にはないと。

「濡れ落ち葉」は奥さんから見て言う言葉でね。旦那から奥さんを見て「濡れ落ち葉」とは決して思わない。尊敬しているからね。ただ、尊敬している相手は、自分を尊敬しているわけではないけどね。この意識的ズレは、大きい。これは総務省が結構な数でやった調査ですけどね。

この落差があるにもかかわらず、男性の平均寿命も伸びてきているから、そういう人たちがネガティブにならないようにするためには、いろんなね。

しかし、それでも「嫌だよ」と。「自分はシニアニートだ」と。シニアニートでもいいんですけど、その人が寝たきり状態にならないようにするためには、地域のシステムが大切だと思うんです。それがもう一つの問題で。

個を助けようとするとき、個だけで助かるということはほとんどないですから。外側との繋がりがあって、初めてできることですから。

その場合、僕が言っているのは、「声掛け隊」だとか。どうしても家から出たがらない人はたくさんいるから。「敬老会に来なさい」と言っても来ませんよ。それだけでは、駄目ですね。ある種の信頼関係が地域との中でできないと。声に慣れるのに時間がかかるんですけど、慣れた声がかかってきはじめると、玄関口に出てきますよ。最初はつっけんどんだけども。それをやっていくと、声に馴染みができるんです。これが人間のコミュニケーションだと思うんですけど。馴染みができた声を聞くと、浅いけど、ちょっとした信頼になります。

「何を趣味にしていますか」と聞いたところで、家から出ない人たちはたくさんいますよ。だけど、家に中にずっといるようでは、確実に衰退していきますよ。

#### 【大島会長】

それはもうはっきりしていますよね。はっきりしたデータがあります。

#### 【大沢副会長】

市民の仕事の中に高齢者を巻き込んではどうかと。お年寄りに回ってもらうんです。僕が散歩していると会う87歳の人。最初、杖をついていたが、ずっと声をかけていく間に、杖を横にして握って持って回っている。今日は、体操していた。この人は、おばあちゃん、堀田さんの話によるとおばあちゃんは強いんですけど。そういうふうなこともあって、だんだん元気になっていく様子が見えるんですよ。これはおじいちゃんもいます。僕は5時半から、1時間半歩きますけど、おじいさん、おばあさん何人かに会います。一番年長は92歳。かくしゃくとして動いている。

「おはよう」でいいから、出ている人には、声をかける。家にいて出たがらない人には、「おはよう」と言えるきっかけがいる。

それから、郵便、宅配、牛乳、新聞。ブザーを押して、一言「新聞だよ」と言ってくれば、その声は聞こえます。またブザーが鳴って、「また新聞だよ」と言うと、「また新聞屋が来やがった」と、こうなって、落語ではないが、それが繰り返されると人間は安心になる。だからたいして金はかからない。多くの人の助けや力をいただきながらやる。それに行政がちょっと手を貸す。だから、議会からも文句は言われたいですよ。

#### 【大島会長】

市民像ということで、地域像と都市像も多少ふれながら、議論いただきましたが、現役世代とかの関係が。堀田さんがちょっとふれてくれましたが、もう少しイメージとして、こうあるべきだというお話が聞きたい。それから、地域像、都市像ということの頭の中に置いてどうなのかと。

これは最初に大沢先生から、生命の安全、生活の保障というシナリオの文脈の中で、それをきちんとインフラとして、安全というものを保障していくというのが、いわゆる人が本当の意味で自立できる状況であって、最低レベルを整備していくのが重要だという指摘がありました。

あまり時間がないですが、もう少し、地域像と都市像を含めて。あるいは、現役世代と高齢者の関係。あるいは高齢者と子どもとの関係とか。そういったイメージでもう少し何かありますか。

#### 【大沢副会長】

愛知県の会合で、大島先生とご一緒させていただいている会合がありましてね。それは、「健康長寿」ですけど。そのときにも、言っているのですが、医療、福祉、食、職場、住居の近接連携というか、そういうまちになっているといいなど。

例えば、大府のまちで、ある程度それが充足できるものをやろうと考えたときに、ウェルネスバレー構想を本気になってやろうとしたらできることですよ。そこに住んでもらうとか働いてもらうとかすればいいわけだから。食は、げんきの郷があるし。

医、福、食、職、住の近接連携…。

#### 【大島会長】

そのお話について、言葉を変えて言うと、地域の中で、ある意味「自給自足」みたいな話ですよ。自給自足をどの範囲までやるかということ。私は、食料自給率についても相当な危機感を持っているんですけど。

例えば、社会保障的なものも地域の中で自給自足するという意識とか、お互いの助け合いというか支援の仕方も含めて。その辺の話を少し。

#### 【大沢副会長】

僕がアリゾナの例を最初に出しましたよね。まち全部が高齢化して、仕方がないから、自分たちが生きていくために、自分たちでね。そういうことは、日本では真似しにくいですが、アメリカはやりやすい。コミュニティを作るときに、保安官がいるでしょ。保安官だって、アメリカのコミュニティを作るときに発生する自発的な防衛装置ですよ。

そういう違いはあるけれど、違いを無視して考えると、そこで、自分たち年寄りが楽しく、自分たちが見守って暮らす。防衛隊、消防士、自己警察組織を作って、お互いが

お互いの命を守り合おうということだね。人口がどんどん減ってきて、昔の住宅団地は衰えようとしていたけど、最近になって、新しい夫婦、家族が入ってきた。理由は、安全だからです。お年寄りが一生懸命生きている姿を見て安心だから。できるだけお年寄りを活かしながら、そういうことをやっていけばいいかなと思っています。

青パトとかね。場合によっては、在宅医療とかで、何か年寄りの生きる場ができてくれば、それはそれでいいのではないかな。在宅医療のシステムの中で、助手をやるとか、介護士の免許をとろうとしている団塊の世代が結構いますよ。

僕としては、そのためにも、介護や障害者問題も含めた希望のあるしくみを作り上げていくことが、一番大事だと思う。希望のある職場は、若者たちも来る。まずは、年寄りが自ら年寄りの助けをやるというものを思い切ってやらせてみたらどうか。そうやって、少し老人を活用する道を考えてみたらいいかなと思います。

#### 【大山委員】

出てくる人はいいんですが、出てこない人に対しては、こちらから働きかけるとすれば、今、青パトで回っている人たちに頼んで、独居老人に一声かけてもらう方法があるでしょうし、老人クラブでも、独居はわかっているわけですから、加入していても加入していなくても一声かけるようなことが大事ですよ。

#### 【大沢副会長】

そうですよ。僕もやっていますよ。斜め前の家のおじいちゃんに声をかけています。おじいちゃんがだんだん出てくる回数が減ってきたので、姿を見ると「おはよう」と声をかけて。その後、おじいちゃんの奥さんから妻が聞いてきた話だと「おじいちゃんがすごく喜んでいた」と。声をかけただけですごく励みになったようだ。これは一例に過ぎません。

逆に僕らが助かっている面もあります。若夫婦の子どもたちが、僕のうちの車が3日も動かないとチャイムを押してくれますよ。押してくれなんて言っていないよ。子どもの頃から一緒に遊んでいたというだけです。今は大学生ですが。ですから地域で作っていくというのが大事。声をかけるということはものすごく大事です。

#### 【大島会長】

次回はまた同じようなテーマで？

#### 【健康福祉部長】

そうですね。もう少し、具体的な話のまとめにもしたいので、今日いただいたご意見を参考にして、事務局からも少しアイデアを出させてください。

## 【大島会長】

都市像とかについて、あまりふれられなかったのです。

とにかく高齢者にとっての居場所を。居場所は非常に重要である。今までに大府市の中にもいくつか準備はされているでしょうが、実態が果たしてどうなのかということはいくつかよくわからないし。とにかく居場所をきちっと提供できたり。あるいは、提供するのには限度があるから。いったいどこまでが個人の責任で、どこまでが役所の責任かということについての議論は、つめれば相当な議論になると思うのですが、そのことは一方で財源の問題とかもきちんと押えながら。象徴的には、引きこもってそのまま虚弱化していくというのは、よくないと言えることなので、そういう状況をできるだけ少なくして、自発的に自立的に居場所を求めて出て来られるような「しかけ」ですよね。そのしかけについて、大沢先生から工房だとかいくつかの例を挙げていただきましたが。

いろんなしかけをどうやって考えていったらいいのかというのは、一つの大きなこれからのあり方だろうと。

特に女性よりも男性に手間がかかる。男性ということに相当意識しながら、しかけを考えていく必要があるというのが、一つ。

それから、生命レベル、生活レベルのインフラ整備。これは、安全安心ということの保障になりますから。それが言ってみれば、日本の社会活動に繋がっていく大きな前提条件ですから。安全、安心、インフラというものは、きちっと整備していく必要がある。

今までにいくつか行政的にやってきた制度、しくみ、施設だとかということがありますが、これを一度全面的に見直してみて、「準備してありますよ」ということで片付けるのではなくて、それが本当に機能しているのかどうか。目標値、あるいは目的を明確にしたうえで、きちんと機能しているかという洗い出しは、やってみる必要があると思います。

先ほど、老人クラブの例で、同じような防犯活動をやっているけど、何故、あの地域とこの地域はこんなに大きな差があるのかということはいくつか、あまり興味がない。ただ、「やっていますよ」ということで、何故こんなに差が出るのかは分からないとか。参加人数が違うとか、参加の仕方が全然違うとかね。これは、一つの例ですけどね。

大沢先生のご発言を捉えて、私が「自給自足」という言い方をしたのですが、地域の中で何をどこまで「自給自足」するのか。「自給自足」という言葉がいいかどうかわかりませんが。安全とか安心とかという言葉が出てきましたが、それは、防犯ということも含めて。医療、福祉、住居問題。どこまで地域が責任を持って、「自給自足」でもって、自分たちの責任で完結させるのか。どの部分をどうするのかということをもっと明解にしていく必要があるのではないかと。

それから、老人の活用ということが、実際には、非常に大きな希望に繋がる。現役世代とか若者にも。老人に希望を持たせられないような状況は、現役世代や子どもの希望を潰してしまうこと。老人にいかに希望を持たせるか。これはものすごく重要なことで。

これは、子どもの時代からの教育でね。意図的なある一定の何かはっきりした教育。これは、大沢先生の言葉でいう「自立と自律」。堀田さんの言葉では、「想像力と創造力」。何を具体的なキーワードに持っていくかというのは、いろいろあるのですが。どちらも素晴らしい言葉だなと思って聞いておりました。

いいキーワードが出てくれば、それを軸にして地域全体の合言葉として、子どものころから示していくことができるといようなご意見だろうというふうに思います。

今日はこれでまとめとしたいと思います。長時間、ありがとうございました。

## 閉 会

### 【広 瀬】

ありがとうございました。それでは、最後に副市長から、ご挨拶申し上げます。

### 【副市長】

貴重なご意見をたくさんいただき、ありがとうございました。

私は、緑区と大府の2か所で住んでおまして、早朝、行き来するわけでございますが。早朝、高齢者の方を見かけます。最近印象に残ったのは、高齢の女性の方が、自転車で新聞配達をしている姿。また、名古屋市で、これはいい例ではないかもしれませんが、高齢の男性が、空き缶を集め、自転車で走っている姿。他にも、ジョギング、ウォーキング、電動カートで散歩される方など、いろんな高齢者を見かけます。高齢者の方が、やはり元気で活動できるまちづくりが理想だというふうに今日のお話を聞きまして感じました。

今度とも貴重なご意見を参考に、できる限り取り入れられるようにしていきたいと思えます。今日は、どうもありがとうございました。

### 【広 瀬】

ありがとうございました。次回は、12月1日（月）午後2時から、2階の202会議室で行いますので、よろしくお願ひします。